

OB訪問

今回ご紹介するのは、札幌市郊外、豊かな森に抱かれた病院で勤務5年になる大久保さん。院内業務と共に、医療現場の課題に直結する研究を進め、精力的に学会やシンポジウムでの発表機会をつかんでいるアグレッシブな病院薬剤師です。

イムス札幌内科・リハビリテーション病院(札幌市) 薬剤師 大久保 利成さん

(薬学部総合薬学科[現・薬学科]2008年卒業、
大学院薬学研究科修士課程2010年修了)



■ 薬剤師、カッコいい!

大久保さんは、大学進学時に「得意な化学で確かな資格を」と薬学部を選択した一人。他の多くの薬学生同様、学び始めの薬剤師のイメージは漠然としたものでした。しかし、3年次、一つの薬剤師像が圧倒的なリアリティで迫ってきたといいます。市立札幌病院薬剤師長から本学教授に着任した唯野貢司教授です。「30年間医療の最前線にいた薬剤師が教授として来る! センセーショナルでした」と大久保さん。

「受け身ではなく、医師に処方提案、看護師に指導できる薬剤師に!」「科学者として研究心を失うな」。心に響く唯野教授の言葉に、大久保さんの中で知識としての「化学」が人と関わる「薬学」へと変わりました。そして臨床と研究、双翼で患者さんの利益を追求する病院薬剤師を未来の自分に重ねるようになりました。「カッコいい!」と思える薬剤師、唯野教授と出会えたから現在の自分があります。学部卒業後は大学院に進学、唯野教授の研究室で覚悟と志を固め、2010年、イムス札幌内科・リハビリテーション病院薬剤師に就職しました。

■ 医療人として、専門家として

大久保さんの勤務先は、内科、リハビリテーション科など5診療科、150床の病院で



大久保さんの職場自慢の一つが「チームワークのよさ」。取材時は、ある患者さんの腰痛について、あらゆる職種のスタッフが改善へのアイデアを出し合っていました。



リハビリスタッフとの1コマ。奥から2人目は本学卒業生の言語聴覚士・阿部耕大さん。この4人、スノーボード仲間でもあります。

す。外来は院外処方のため、大久保さん含め4名の薬剤師は、入院患者さんとのかわり方が自然と深くなります。大久保さんも薬剤師の専門性に限定されない人間関係を大切にしています。ある末期がん患者さんは大久保さんを「一番頼りにしている病院の人」と呼びました。医療人冥利に尽きるこの言葉は、患者さんが亡くなり、時を経ても大久保さんの胸で温もりを失うことはありません。

患者さんのメリットに直結する薬剤師の仕事として、大久保さんは医師への処方提案を積極的に行っています。たとえば腎機能の低下した患者さんの薬の変更提案です。薬が体から排出されるプロセスは、腎臓の働きで尿から、または肝臓が関与して便から、と大きく2つです。腎機能が低下していると腎排泄の薬は体内に蓄積されやすく副作用のリス

クが高まるため、肝代謝の薬への変更を提案するのはです。また、医師の依頼で、抗生剤を安全、有効に投与するための間隔、量を決定する投与設計も薬の専門家としての責任と張り合いを感じる業務の一つだといいます。



柔道二段! 大学時代は柔道部部长として20人以上の部員をまとめ、東薬運大会でメダルも獲得しました。

■ 科学者魂を忘れない

研究活動も現場を知る薬剤師の視点で進めています。持参薬(転院患者さんが持参した他病院で処方された薬)の有効性とリスクについて、大久保さんは学会でも存在感を示すようになってきました。2014年は札幌病院薬剤師会のシンポジウムや北海道医療安全研究会、日本医療薬学会で発表者を務めました。さらに、現場とは別の課題解決に向けて、本学との共同研究も動き出しました。今後の目標の一つには、感染制御専門薬剤師の資格取得も挙げています。

やわらかな物腰からは意外に思えるほど強い芯が通っている大久保さん。「大久保さんに出会えたから現在の自分があります」と後輩に言わせる日が、きっと来るでしょう。



本学、唯野研究室の後輩、吉田涼さんと。研究、発表や講演の準備は通常業務を終えた18時頃からスタートです。